

作品間の「継承性」を意識した古典学習の可能性： 『奥の細道』『平泉』を題材として

著者	大庭 礼
雑誌名	静岡大学教育実践総合センター紀要
巻	28
ページ	284-291
発行年	2018-02-28
出版者	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
URL	http://doi.org/10.14945/00024684

作品間の「継承性」を意識した古典学習の可能性

——『奥の細道』『平泉』を題材として——

大庭 礼

Possibility of classical learning with consciousness of "succession" between literatures

—— subject: *Hiraizumi "Okunohosomichi"* ——

OHNIWA Aya

Abstract

This study discusses the possibility of classical learning with consciousness of "succession" between literatures in learning "traditional language culture and characteristics of national language". "Succession" is that classical literatures originally has "create new works by receiving preceding works". From the actual state of the junior high school textbook, I studied the learning of "succession" with *Hiraizumi Okunohosomichi* as a theme. In *Hiraizumi*, considering the passage of "*Shunbou*", we can learn that the succession of traditional language culture has been done also in the classical world for us, and it is inherited while and transformation repeatedly. We can also learn that it has come are being transmitted to the present. In high school, in addition to the "succession", in addition to touching the difference in how to draw by genre, as the supplementary teaching material using "*Tsurezuregusa*" with "*Hiraizumi*". It is possible learning systemized from junior high school.

キーワード：継承性、奥の細道、春望

1、はじめに

本研究は「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の学習における、作品間の「継承性」を意識した古典学習の可能性について論じるものである。

「継承性」とは、古典作品が本来持っている「先行作品を受けて新たな作品を創出する」という性質のことであり、国語教育においても有効な視点として注目されている。以下、国文学、国語教育実践等の研究における「継承性」に関する言及を整理し、本研究における「継承性」の定義とその意義を示す。

2、「継承性」の具体像

国文学研究において「継承性」の重要性は指摘されてきた。鈴木(2006)は、『徒然草』序文が「つれづれなるままに」という平安時代の常套的表現を踏襲しつつ、そこに「ものぐるほし」という語を付加することで「共同性を基盤に個性を表出」していることを例に、文学作品とは「過

去の作品表現の集積によって成り立っている。すぐれた作品はその上に新しい価値を付与したもの」(p.10)であるという。そして、「共同性と個性が補完的に紡ぎ出されていくことのなかに、古典文学の真髄が見え隠れしていると言ってよい」(p.12)とも述べている。

鈴木の指摘にあるように、そもそも文学作品は先行する作品を継承した上で成り立っているのであり、それゆえに先行作品を踏まえている点に「古典文学の真髄が見え隠れしている」のである。そうであるならば、古典文学作品の独自性や優れた表現を読み味わうためには、その作品が先行する古典作品をどのように踏まえているのかを考えること、つまりは「継承性」を理解し意識して読むことが重要であると言える。

「継承性」の重要性は現行学習指導要領でも明示されていると言える。『中学校学習指導要領解説国語編』では学ぶべき「言語文化」を次のようなものであるとする。

言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた言語芸術や、芸能などを幅広く指している。(p. 21)

学ぶべき「言語文化」は「歴史の中で創造され、継承されてきた」ものであり、また「古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた」ものを幅広く含むとして、古典作品の「継承性」を強調している。

これを受けて、藤本(2009)は「従来中学校でなされてきたように枕草子や徒然草の一部を読ませ、それを対象に「昔の人のものの考え方や見方に触れ、現代人のそれと比較してみよう」という類の学習活動で事を済ませるわけにはいきまい」とし、今日の古典学習のあり方について、次のように指摘する。

たとえば「春はあけぼの」であれば、万葉集において萌芽し、古今集で体系化・規範化された和歌的表現との比較や、同時代の源氏物語、後世の新古今和歌集・徒然草への影響関係を概観しつつ、芭蕉や蕪村を経て現代へと、いかに引き継がれ、いかに新しい展開を見せているのかを考える。(p. 51-52)

つまり、古典学習においては、それぞれの作品の持つ「継承性」についてより広く意識し、享受という視点から古典作品を読んでいく授業が必要であるということである。

高等学校の実践にはなるが、現行学習指導要領より、高等学校においても国語総合に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設されたことを受け、小尾(2009)は古典学習を行うことについて、次のように述べている。

作品の史的展開に重点をおいた指導を通して、現代に至るまで人々がどのように古典作品を享受してきたのかを理解することに努めていきたい。(p15)

小尾はこの目的のもと、『大和物語』『姨捨』と『更級日記』『更級紀行』との関連を考えたり、能「姨捨」や映画

「楡山節考」の鑑賞をとおした原作の理解を深めたりする授業を行っている。つまり、「継承性」を意識した古典学習の実践を行っている。

笠原(2012)は『竹取物語』を題材に、この他『万葉集』、『今昔物語』、『海道記』、『古今為家抄』、『古今和歌集序聞書三流抄』から一部を抜粋した関連テキストを用い、「物語に関する文学史的知識」と「物語の伝承性の持つ変容性」(p. 45)についてまとめる実践を行っている。

小尾の実践は、一つの古典文学作品が後代の他の作品に影響を与えているという面での「継承性」の実践であり、笠原の実践は先行する作品をどのように踏まえているのかを考えた上で、さらには後代の作品にどのように踏まられているのかを考える実践である。一方、一つの古典作品が後代においてどのように読まれていたかという問題自体を学習することについての検討もなされている。

有馬(2010)は『源氏物語』の江戸時代における享受を例に、「古典とは、これまでさまざまな時代状況のもとに、さまざまな形で享受・受容されてきたものであるがゆえに、その享受・受容のありかたをみることで、そこに絡む様々な文化的事象、文化のありようをうかがいしることができるともであり、また、人々をそうした享受・受容へとかりたてるような原典の持つ要素を考えてみることで、人間やその文化の根源的な部分に触れることにもつながっていく、そこに古典を学ぶ意義があるのではないか」(p. 7)と指摘する。

有馬の提案は学校教育での具体的な指導の提案まではされていないものの、一つの古典文学作品の「享受・受容」の様相を学ぶことをとおして、「伝統的な言語文化」のあり方を学習できるという可能性を打ち出している。

以上をまとめると、古典文学作品とは、先行する作品を踏まえて成り立っているものであり、したがって、古典学習をするにあたっては、享受つまりは「継承性」という視点が不可欠であるということになる。それは、笠原(2012)の報告で、学習のまとめとして、古典が「時代の中でどのように変化してきたかを知るため」に古典を学習するのではないかとまとめた生徒の学びが見て取れることから言えるだろう。そして、「継承性」について学習するにあたっては、作品間の「継承性」に着目するものと、一つの作品の享受・受容の様相を捉えるものと、二つの方法が先行研究により提示されてきた。

しかし、「継承性」を重要視した研究・実践が行われている一方で、「継承性」を意識した実践の多くは高等学校を対象にしたものであり、中学校での実践報告例は多くないように思う。その原因は、中学校では取り扱う古典作品数自体が少なく、また中学校は生徒が本格的に古文（原文）に向き合うような古典学習の導入の時期であることが考えられる。「伝統的な言語文化」の学習が小学校での学習に下りてきている今日の古典学習において、中学校では小学校の学習を深め、また高等学校での学習に接続できるような学習が求められると言えよう。

中学校での古典学習のあり方について、内藤（2012）は小学校・中学校・高等学校での古典学習の系統性の課題について論じる研究において、次のように述べている。

小学校で多様な作品に触れることや、その結果としての暗唱などが実現したとき、中学校の学習はこれまで以上に概要把握にとどまらない、一歩進んだ作品理解を求める意見や方法の提案がなされよう。つまり、系統性のカギは中学段階にあると考える。（p.7）

内藤の指摘にあるように、「系統性のカギ」を握っている中学校では、中学校独自の古典学習を考えていく必要がある。原文に向き合うような古典学習の導入の時期として独自性があり、かつ高等学校との接続を意識できるような学習に、「継承性」が有効であると考え、『奥の細道』『平泉』を題材にその可能性を再検討することとした。

3、『奥の細道』『平泉』を題材とする理由

題材の選定にあたり、現行教科書（平成28年度使用のもの）を対象に、採択されている古典作品及びその章段等を調査した。その結果、中学校国語教科書に採択されている古典作品は【別表】のとおりであった¹。

【別表】より、作品間の「継承性」が顕著に表れている作品の組み合わせとしては、『枕草子』『春はあけぼの』における『古今和歌集』の享受、『枕草子』『雪のいと高う降りたるを』における『白氏文集』『香炉峰の雪』の享受、『奥の細道』『平泉』における『唐詩三百首』『春望』の享受があげられる。しかし、『枕草子』『春はあけぼの』における『古今和歌集』の享受を見るときに、『古今和歌集』において規範化された季節ごとの景物を捉えることがで

きるほどの和歌を掲載していないという問題があり、また『枕草子』『雪のいと高う降りたるを』における『白氏文集』『香炉峰の雪』の享受を見るときにも、二作品を併せて採択している教科書は一社のみであるという問題がある。そこで、本研究においては、五社すべての教科書に採択されている『奥の細道』『平泉』を題材に、「継承性」を意識した古典学習の可能性について検討することとした。

しかし、『奥の細道』『平泉』を題材とするにあたって、一つ問題がある。それは「平泉」が高等学校国語総合の教科書にも多く採択されているという問題である。国語総合の教科書のうち、古典作品を掲載している教科書は9社23種あり、そのうち「平泉」を採択しているのは8社19種の教科書になる。重複している題材については、学習内容までが重複しないよう注意が必要があることから、高等学校における「平泉」の授業についても、その見通しを併せて考えることとする。

また、題材そのものを見たときに、「平泉」は広く知られているように、「春望」の一節や、『義経記』・幸若舞曲・古浄瑠璃を踏まえている章段である。「源義経が高館で自害したこと」は『義経記』や幸若舞曲、古浄瑠璃に描かれており、「義臣すぐつて此城に籠り、功名一時の叢となる」はこれらの先行作品を下敷きにしていると考えられる。また後述するが、「春望」の一節があることは、「平泉」が「過去の作品表現の集積によって成り立っている」ことの表れであり、「継承性」を学ぶ好教材と言える。

さらに、「平泉」には「不易流行」の理念が書かれている。「不易流行」は「変わらないものと変わっていくもの、両方がある文学作品は良いものとされる」という文学理念であり、この理念こそ「古典文学作品の継承性」である。したがって、「不易流行」について捉えることをとおして古典文学作品の「継承性」についても学んでいくことが古典学習及び日本の言語文化について知ることに有効であると考えられる。

4、「平泉」の解釈—「青みたり」と「夢」—

「平泉」を授業で扱うにあたり、文学研究の成果をもとに解釈を定める。中でも重要なのは「青みたり」の表現と、「夏草や」句の「夢」の語意である。

「青みたり」は現在「青々たり」と表記に揺れがある。「草青む」という表現は『風雅和歌集』所収の歌にも見ら

れ、『奥の細道』以前にも馴染のある表現と言える。この表現に変更することにより、①漢詩でありながら日本風の伝統的表現となる、②「草むら」「夏草」の情景に合致するようになるという効果がある。こうしたテキストの変更も、芭蕉の執筆の工夫が見られる部分であり、「不易流行」の「流行」の部分の表れと言える。

従来「夏草や」句の訳において、「夢」は「将来かなえたい目標」といった意味を含むものとして捉えられることが多かった。これについて深沢（2006）は酒井紀美氏の指摘を踏まえ、「夢」を「願望」だけの方向でとる解釈は、「夢」の語義の変遷から言っておかし（p.196）く、少なくとも芭蕉の時代にはなかったと指摘している。現代語訳をするときには注意しなければならない。

以上二点は授業の前提として重要なことであり、また、この検討自体も授業での活動として取り入れられる可能性を持っていることを指摘しておく。

5、中学校における授業

中学校での指導は「春望」の一節を「平泉」に取り入れた効果を考える活動をとおして、「文章を読んで、構成や展開、表現の仕方について評価することができる」（読むこと指導事項ウ）ようになることを目標とした。また表現構成への着目に留まらず、表現構成によって内容についてのどのような解釈が可能になるかという指摘まで踏み込みたい。単元としては、「日本の言語文化のあり方を捉える」を目標に、『奥の細道』をとおして、先行作品を踏まえて新たな作品を創出していくという日本の文学の様相を捉えるようにしたい。

単元構想は次のとおりである。

第一次	<ul style="list-style-type: none"> ・コラムを読み、古典を学習する意義を考える。 ・「冒頭」の音読をする。
第二次	<ul style="list-style-type: none"> ・松尾芭蕉・『奥の細道』についての基本事項をおさえる。 ・旅の過程のどこに「平泉」は位置するのか確認する。
	<ul style="list-style-type: none"> ・「平泉」を音読し、現代語訳する。 ・「夏草や」と「卯の花に」の句の訳を考える。
	<ul style="list-style-type: none"> ・「平泉」を読み、芭蕉が「不易流行」を「自然／人間」という対立をもって表現していることに気付く。 ◎「春望」の一節が引用されていることによりどのような意味があり、また効果があるかを考える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・「光堂」を音読し、現代語訳する。 ・「平泉」で捉えた「自然（不易）／人間（流行）」の考えから、芭蕉は「光堂」もいずれは「叢となるべき」ものとして捉えていることをおさえる。
第三次	<ul style="list-style-type: none"> ・「冒頭」から、芭蕉が「人生とは旅」であり、「変わっていくことこそが普遍である」と捉える一方で「変わらないもの」を求めて旅に出たことを読み取る。 ・「平泉」も「冒頭」も「不易流行」の基本理念が現われていることを捉える。

「春望」の一節がある効果について、表現構造として、

①「平泉」の情景描写として機能していること、原文のまとめのような一節となっているために②文章にまとまりができ、自然と人間の対立がよくわかることがあげられる。①については加藤（2010）が、②については鈴木（2007）がまとめている。鈴木は「平泉」の構造と主題について、「自然の悠久さと人間のはかなさが対立的に繰り返し語られていて、それがここでの最も基本的な主題である」（p.45）と指摘し、「春望」の一節については「〈自然〉〈人間〉の両者の対立がさらにはっきりとし」（p.45）、また〈自然〉〈人間〉の対立を「夏草や」句によって「定位させている」と指摘している。「夏草や」句の機能について生徒が自ら気づき、生徒の言葉でまとめることは難しいと考える。しかし、「春望」の一節と「春望」の一節が入る直前までの本文とを比較し、それぞれ対応する言葉を見つけることは可能であると考えられる。

内容としては、③「春望」つまりは漢詩が入ることで「人のはかなさ」や「自然の悠久さ」は日本においてのみ言えることではなく、世界でも同様であるとする解釈ができると考えられる。

「冒頭」の授業では、叙述から旅に出た目的を読み取る。鈴木（2006）は『奥の細道』の旅の目的は「冒頭」にある「漂泊すること」であり、この「漂泊すること」には、①自然と触れ合う、②人間と出会う、③古人の軌跡を確かめるといふ三つのねらいがあったという。

中学校での授業においても、第一の目的である「漂泊すること」は必ず押さえたい。なぜなら鈴木も言うように「いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず」と芭蕉本人が本文で述べていることであるからだ。

次に三つのねらいについてであるが、これは漂泊の思いのように芭蕉が本文で明確に目的として述べている事項ではない。その中でも叙述に根拠を求め、考えることが可

能と思われるのは③古人の軌跡をたどることである。「古人もまた旅に死せるあり。予も」と続くことから、芭蕉は古人と同様に自分も旅に生き旅に死にたいと言っていることを、ここから読み取ればいい。しかし、なぜ古人の軌跡をたどりたかったかを考えるには、当時芭蕉が「かるみ」模索の時期にあり、伝統の中でいかに新しきをもたせようかと試行錯誤していた背景が必要になる。

①自然と触れ合うことについて、本文だけを題材に生徒に読解を求めるならば、「松島の月」という語から松島の風景(夜景)を芭蕉が見ようとしていることは読み取るべき点として課題にできると考える。しかし、なぜ松島なのかについては、松島が景勝の地であり、歌枕であったという知識が必要になる。歌枕は伝統的に和歌に詠まれてきた地で、その地の風景や自然を見ることが古人の軌跡をたどることにもなったという点を説明する必要がある。

②の人との出会いについて、鈴木(2006)は普段出会うことのできないような人に会うことで「自己の感性を高める契機」(p.115)になると指摘する。しかし中学校の教科書にある章段で人との出会いに主題をおくものではなく、「冒頭」でも人との出会いを目的とするとは書かれていない。この目的に到達するには、中学校の教科書に採択されていない『奥の細道』本文の解釈が必要とされ、中学校の授業の範囲を超えると考えられるため、中学校の指導ではこれを旅の直接の目的には含めないこととしたい。

また「冒頭」においては、「月日は百代の過客にして、行交う年もまた旅人なり。」とあることから、月日や年は時々刻々と流れていくもの、つまりは流行するものであると唱えている。その一方で「白河の関」や「松島の月」という言葉を出すことで、伝統的に和歌に詠まれてきた歌枕の地である、換言すれば不易であるものにも深く関心を抱いていたことを述べている。「冒頭」においても「不易流行」の理念を芭蕉が説いていることを読み取りたい。

単元の構想について、普通作品の「冒頭」を学んでから「平泉」に入るところ、その順番を逆に設定した。これは、抽象的な理念を理解するためには、先に具体的な事柄とおして捉えるのがよいと考えてのことである。「平泉」は「不易流行」の理念を、平泉の〈自然〉と〈人間〉が関与したものと対比をもって表現していた。つまり、〈自然〉対〈人間〉という具体的な事柄から「不易流行」を捉えた後に、「冒頭」を学習することで、抽象的な表現であっても

「不易流行」の理念について実感を伴って理解することができるのではないかと考える。

「平泉」の授業の概略は以下のとおりである。

学習内容・活動	◎発問 ・教師の発言 ●留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・「平泉」を全員で音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「平泉」本文を全員で声に出して読みましょう。
<p>「平泉」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「跡」という文字を追う。 ・「跡」という字の意味を考える。 ・「跡」となり、消えてしまったものは何か捉える。 ・「跡」にならず、残っているものを捉える。 ・残ったもの＝自然、消えたもの＝人間が関与したものであることを捉える。 ・自然と人間の対比を不易と流行の対比としていることを捉える。 <p>「春望」を引用した意味や効果を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で考えた後、グループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「春望」の一節を隠しておく。 ・「平泉」の文章には、「跡」という言葉が何回か繰り返されています。「跡」という文字を本文から探し、丸で囲みましょう。 ・「跡」とはどのような意味の言葉でしょうか。上に一文字補って、熟語にして考えましょう。 ・「跡」とは消えてしまったものが存在したことを示す印です。跡の上にはかつてはあつて、今ないものがあるということですか。 ・消えてしまったものは何ですか。現代語訳を参考に読み取りましょう。 ・消えてしまったものとして他に書かれているものはありますか。 ・芭蕉が訪れた当時に、昔と変わらず残っているものがあります。本文から抜き出しましょう。 ・消えたものとして書かれているものの共通点は何でしょうか。 ・人が関与しているものは、いつかは消えることがありますか、自然はどうですか。 ・「平泉」は、芭蕉の「不易流行」の理念をどのように表現していると言えますか。 ●「春望」の一節を提示する。 ◎「春望」の一節は、それより前の文章とどのような関係にありますか。 ・「春望」はどのような内容の詩でしたか。 ・芭蕉は「春望」の一節を用いることで何を表現しようとしたのでしょうか。 ●グループで話し合うための

	材料として、授業前半で整理した「自然／人間」の対応や、「春望」が漢詩であることを提示する。
--	---

「平泉」に書かれている「不易流行」の対比について生徒が気づくためには、以前と変わらず残っているものと、残らなかったものにそれぞれ何があるかを捉える必要がある。そこで残らなかったものに気づけてだてとして、本文から「跡」という文字を探して丸で囲む作業を提案したい。「跡」とは以前は存在していたものを証明する物のことで、「痕跡」という熟語にすると語意がわかりやすくなる。「跡」という字を追えば、「跡」の上に本来あったはずのものが今は消えてなくなっているということが分かる。また物質的なものではないが、「三代の栄耀」や「功名」もはかなく消えてしまったものである。これらは現代語訳の「はかない」という部分から読み取れるとよい。反対に、残ったものについては「跡」と表現されていないことを根拠に見つけていく。残ったものには「金鶏山」「高館」「北上川」「衣川」「和泉が城」があげられる。「高館」や「和泉が城」は人工物であり、「平泉」の主題である「不易（自然）／流行（人間）」の対比から外れる。しかし、次の段階として、消えたものに共通する事項を「人間が関与したもの」としてまとめ、その後「自然はどうですか」と問うことで、「人間が関与したものはいつかは消えてなくなってしまうが、自然は消えない」というまとめができる。このようにしてまとめると消えたもの＝流行＝人間、消えなかったもの＝不易＝自然として「不易（自然）／流行（人間）」と表現されていると生徒は気づくことができる。

主発問を「『春望』の一節は、それより前の文章とどのような関係にありますか」とすることで、「平泉」で表現している「自然／人間」の対比を際立たせるという、文章の構成や表現について考えることができる。一方で、文章の構成や表現について考えるためにも、「春望」の内容と「平泉」の内容を比較し、類似点や相違点を見つけていく活動をするようになる。そのため「春望」と「平泉」の関係を内容面から考える学習活動も可能になる。さらに、似たことを言っているのになぜ「春望」の一節を踏まえたのか、踏まえることで何を表現しようとしていたのか、その理由や効果について考えることで、芭蕉が「不易流行」について表現するとしたときに、先行する文学作品を享受しそれを踏まえつつ、「平泉」という新たなものを創造して

いった姿勢を想像することができるだろう。

「春望」の一節の享受を考えるとをとおして、伝統的言語文化の継承は、私たちにとっての古典の世界でも行われてきたことであり、享受と変容を繰り返しながら受け継がれてきたものが今に伝わっているという、大きな流れを掴むことができるのである。

6、高等学校における授業

「平泉」における先行文学の享受について「春望」を取り扱ったものを中学校で学習した場合、高等学校では継承性に加え、ジャンルによる描き方の違いに触れることを学習目標に、補助教材として『徒然草』第二五段を用い、「平泉」と比較する活動を考えた。「読むこと」の「指導事項エ」を扱うものとし、単元目標を「『平泉』と『徒然草』第二五段を比較して、表現の違いに気づき、ジャンルによる表現の違いや作品の主題を捉える」とした。

第二五段は法成寺の荒廃を題材に、人間のはかなさを述べており、『徒然草』のテーマと言える「無常観」を強く表現している章段の一つである。『徒然草』と「平泉」の関係については稲垣(1999)が述べている。稲垣は「平泉」が第二五段を踏まえていると述べているが、その検討についてはひとまず措き、学習の主眼はあくまでジャンルの違いに目を向けることとする。

第二五段も「平泉」も、人の栄耀栄華のはかなさを題材にしている点で一致する。内容も、時がたてば人が関わることは何事も変わっていくということや、かつての権力者の象徴であった寺院が荒廃しているさまを述べている点で一致している。

しかし、『徒然草』は随筆で、無常観を一貫して述べているのに対し、「平泉」は変わるもののみではなく、変わらず残るもの（自然）もあると述べている。また第二五段では「はかなし」「あはれ」といった情を表す語を用いているのに対し、「平泉」ではそういった語はない。また「平泉」には「一里こなた」や「へだて」、「和泉が城めぐり」等、距離や地形の説明がされている。これは、「平泉」があくまでも『奥の細道』という紀行文の一部であるためである。二作品の共通点と相違点をまとめていくことで、紀行文として「平泉」を捉えるようにしたい。この時、本文の一節を引用しながら二作品の表現の違いをまとめる活動を入れることで、本文の表現により注意して内容を読め

るようにしたい。

7、おわりに

以上、本研究では古典作品の本質である「先行作品を受けて新しい作品を創出する」という「継承性」を重視した古典学習の可能性について論じた。国文学研究、学習指導要領において「継承性」は重視されており、実践もなされている一方で、中学校での実践報告例は多くない。小学校から中学校・高等学校への系統立てた学習を目指すためには、中学校での古典学習のあり方を検討していく必要がある。その手段の一例として、中学校では『奥の細道』『平泉』における「春望」の一節の享受を考えることで、伝統的言語文化の継承は、私たちにとっての古典の世界でも行われてきたことであり、享受と変容を繰り返しながら受け継がれてきたものが今に伝わっているという、日本の伝統的な言語文化のあり方を捉える授業を示した。さらに高等学校では、『奥の細道』『平泉』の学習に、補助教材として『徒然草』第二五段を用いることでジャンルによる表現の違いに着目し、紀行文としての「平泉」を捉える学習を行うことで、中学校で学習したことを踏まえた学習を展開できるのではないかと考えている。

今後は本研究に基づき、「継承性」に着目した実践を行うことで、生徒がどのように古典と向き合うようになっていくか、その様相について検討していきたい。また、「継承性」は文学作品のみに見られる性質ではない。古典芸能や絵画にも「継承性」は見られる。「伝統的な言語文化」として古典を学習するにあたって、そうした文学作品に限らない古典作品を学習に活用する方法も検討したいと考えている。

【別表】中学校教科書に採択されている古典作品

教科書	採択されている古典作品
中 A1	『伊曾保物語』『犬と肉のこと』『鳩と蟻のこと』、『竹取物語』『冒頭』『天人の迎え』、『矛盾』
中 A2	『枕草子』『春はあけぼの』『九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の』、『徒然草』『序文』『仁和寺にある法師』、『平家物語』『祇園精舎』『那須与一』、『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』『春望』
中 A3	『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『枕草子』『春はあけぼの』『うつくしきもの』『香炉峰の雪』、『春望』『元二の安西に使ひするを送る』『静夜の思ひ』、『おくのほそ道』『旅立ち』『平泉』

	歌集』、『おくのほそ道』『冒頭』『平泉』、『論語』
中 B1	『竹取物語』『冒頭』『かぐや姫と帝の和歌』『天人の迎え』『昇天』『ふじの山』、『宇治拾遺物語』『とらわれた心に突き立つ矢』、『五十歩百歩』『矛盾』
中 B2	『平家物語』『祇園精舎』『敦盛の最期』、『徒然草』『高名の木登り』『猫また』、『論語』
中 B3	『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『枕草子』『春はあけぼの』『うつくしきもの』『香炉峰の雪』、『春望』『元二の安西に使ひするを送る』『静夜の思ひ』、『おくのほそ道』『旅立ち』『平泉』
中 C1	『竹取物語』『冒頭』『天人の迎え』、『矛盾』
中 C2	『枕草子』『春はあけぼの』『うつくしきもの』、『徒然草』『序文』『仁和寺にある法師』『ある人弓射ることを習ふに』、『平家物語』『祇園精舎』『敦盛の最期』、『春暁』『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』『春望』
中 C3	『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『奥の細道』『月日は』『平泉』『立石寺』、『論語』
中 D1	『竹取物語』『冒頭』『天人の迎え』『昇天』、『矛盾』
中 D2	『平家物語』『祇園精舎』『敦盛の最期』、『枕草子』『春はあけぼの』『うつくしきもの』、『徒然草』『序文』『仁和寺にある法師』『ある人、弓射ることを習ふに』、『論語』
中 D3	『おくのほそ道』『旅立ち』『平泉』『立石寺』、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』『春望』参考に『春暁』
中 E1	『竹取物語』『冒頭』『蓬萊の玉の枝』『ふじの山』、『矛盾』
中 E2	『枕草子』『春はあけぼの』、『平家物語』『祇園精舎』『扇の的』、『徒然草』『仁和寺にある法師』『序文』、『春暁』『絶句』『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』参考に『春望』
中 E3	『論語』、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『おくのほそ道』『冒頭』『平泉』

注

- 1 【別表】は公益財団法人教科書研究センター平成 27 年度大学院生教科書研究論文に、「中等教育における古典教材の実態に関する研究」と題して提出したものである。また、【別表】の表記について、二重鉤括弧『』は作品名を、鉤括弧「」は章段名等を、丸括弧 () は漢文作品

を表す。なお、作品名・章段名等は原典の表記にしたがった。

参考文献

- 有馬義貴 (2010) 「古典の享受・受容から学ぶ文化と伝統—『源氏物語』の享受・受容を例として—」『早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編』第 58 号, 1-9.
- 稲垣安伸 (1999) 「「おくのほそ道」〈平泉〉—大門—」『解釈』通巻 534・535 号, 41-47.
- 小尾きよこ (2009) 「名月の里「姨捨」誕生へ迫る」『月刊国語教育』通巻 347 号, 12-15.
- 笠原奈緒子 (2012) 「古典の伝承性に注目させる授業—『竹取物語』の導入として—」『月刊国語教育研究』通巻 485 号, 44-45.
- 加藤郁夫 (2010) 「古典教育のための一試論—『奥の細道(平泉)』を教材として—」『研究紀要』第 12 号, 71-81.
- 鈴木健一 (2006) 『知ってる古文の知らない魅力』講談社現代新書
- 鈴木健一 (2007) 『古典詩歌入門』岩波テキストブックス
- 内藤一志 (2012) 「小中高における古典(古文)学習指導の系統性と課題」『月刊国語教育研究』通巻 488 号, 4-9.
- 深沢眞二 (2006) 「枯野の夢夏艸の夢(下)」『文学』第 1 号, 193-205.
- 藤本宗利 (2009) 「「伝統的言語文化」をどう指導するか—小学校における古典教育を考える—」『月刊国語教育』通巻 348 号, 50-53.

[付記]

本稿は平成 28 年度第 131 回全国大学国語教育学会東京大会(於白百合女子大学)での口頭発表をもとにまとめ直したものである。発表席上、及び発表の前後で貴重なご教示を賜りました、有馬義貴先生、浅田孝紀先生、渡辺春美先生に深謝申し上げます。